

黒田官兵衛と、その子孫たち

来年からいよいよ、NHK大河ドラマで、福岡ゆかりの黒田官兵衛を主人公にした「軍師官兵衛」が始まります。江戸時代約270年にわたって、福岡の地を安泰に治め、その歴史をいま一度振り返ってみましょう。



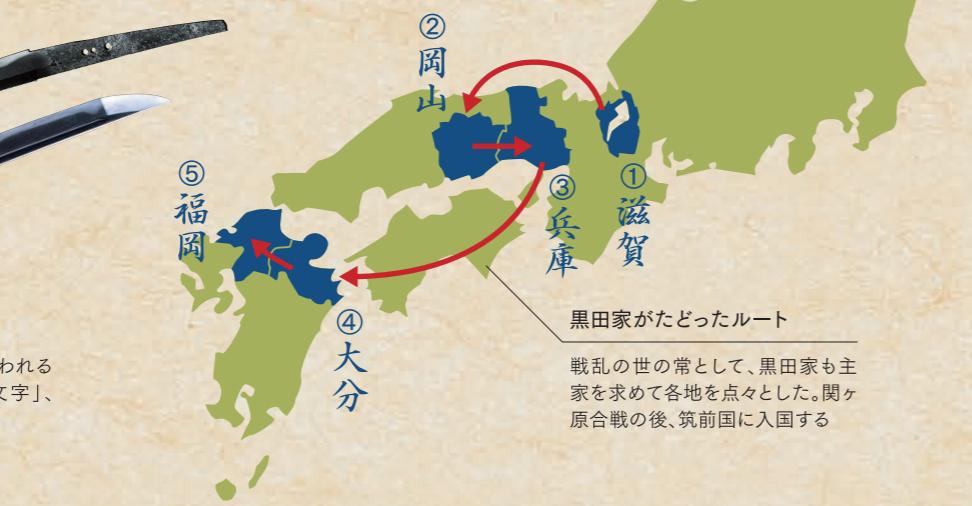
黒田長政(1568年～1623年)
官兵衛の長男で、父とともに数々の戦功を挙げ、筑前福岡藩の初代藩主となった福岡市博物館蔵

黒田官兵衛(1546年～1604年)
本名孝高。秀吉のもとで多くの城攻めの指揮を取り、優れた戦略から「稀代の智将」と呼ばれた。息子・長政ともども一時キリスト教に入信するが後に棄教する。隠居後は「如水」と名乗る。この肖像画は、黒田家の菩提寺である福岡の崇福寺に伝来するもの。崇福寺蔵



朱漆塗合子形兜と
黒糸威五枚胴具足

黒田家3代藩主・光之が、官兵衛をしのぶために作らせたと記録される。お椀を返したような兜の形が独特。藤本健八撮影 福岡市博物館蔵



黒田がたどったルート
戦乱の世の常として、黒田家も主家を求めて各地を点々とした。関ヶ原合戦の後、筑前国に入国する

滋賀から岡山、兵庫、大分そして黒田家は福岡へ

黒田官兵衛の祖先をたどると、琵琶湖の北東、近江国（滋賀県）伊香郡黒田村にそのルーツがあります。今も黒田地区自治会館のそばには「黒田氏旧縁之地」の碑が建っています。

16世紀初頭に、足利将軍家の不興を買つてこの地を離れた黒田一族は、次に備前国（岡山県）邑久郡福岡に居住（この地名が、後にここ福岡の命名につながっています）。さらには播磨国（兵庫県）に移り、大名・小寺政職に重臣として仕えました。官兵衛が生まれたのも、ここ播磨です。

永禄4（1561）年、15歳で父とともに小寺政職に仕え、成人すると父から家老職を引き継ぎます。時流を見る目に秀でていた官兵衛は、織田信長の才能を高く買いました。さらには羽柴（のちの豊臣）秀吉の参謀となり、鳥取城の兵糧攻め、備中高松城の水攻め、柴田勝家との賤ヶ岳の戦い、四国攻め、九州攻めで巧みに作戦を成功させ、秀吉の軍師としてそ



崇福寺に残る官兵衛の墓所。ここには長政ら歴代藩主の墓も並ぶ

秀吉も脅威を抱いた、官兵衛の力量

秀吉の有能な参謀として、数々の敵を攻略した官兵衛。秀吉は彼を高く買ひながらも、一方でその力を恐れていたようですね。幕末の館林藩主・岡谷繁実が残した「名将言行録」にはこんなエピソードが載っています。秀吉が家臣に「わしに代わって次に天下を治めるのは誰か」と尋ねたとき、多くが徳川家康や前田利家を挙げたのにに対して、秀吉は黒田官兵衛を挙げたとか。「官兵衛がその気になれば、わしが生きている間にも天下を取るだろう」と言つたそうです。それを聞いた官兵衛は秀吉の勘気を危惧し、直ちに剃髪し、如水と称して隠居。長政に家督を譲つたと記されています。

「福岡城に天守閣はあったか」…論争は今も続く。



花見スポットや各種競技場として福岡市民に親しまれる福岡城址。石垣や堀、多聞櫓、下之橋御門などが今も昔の面影を残していますが、「肝心の天守閣は造られたのか?」という疑問が、長く論争の的になっていました。

そもそも官兵衛は、秀吉の參謀として各地で連戦していた時代から“築城の名手”といわれていました。官兵衛が関わったとされる主な城は、姫路城、大坂城、讃岐高松城、名護屋城（現在の唐津市鎮西町）、広島城、梁山倭城（韓国釜山）、中津城などがありました。（※縄張り担当も含める）

その官兵衛が満を持して築いた福岡城ですから、堂々たる天守閣を建造しても不思議ではありません。ただ、天守閣のことは博多に残る古文書にほとんど記されていないのです。「幕府に遠慮して造らなかった」、あるいは「すでに戦乱の世は終わり、天守閣が籠城に無用の時代になっていた」のでは…とされてきました。

しかし最近になって、「一度は造ったが、幕府に配慮して壊したのでは?」という説が出ています。細川家の資料（永青文庫）で、細川忠興が父の幽斎に宛てた書状の中に、「（黒田が）いずれ天守まで壊すであろうと、噂されている」という記載が発見されて、話題を呼んだのです。

果たして、福岡城に天守閣は存在したのか、否か。どちらであっても、想像力をかきたてる話ですね。

※築城にあたっての「縄張り」とは?

築城に際して、その土地の地形や城の規模などにより、堀や石垣、門、曲輪などの配置を決めること。これが名城となるための最大条件になる。



崇福寺の境内。かつての福岡城から移築された正門も残っている



福岡城築城の前に黒田氏の居城だった名島城の門。福岡城築城の折、再利用のために移築された

如水・長政父子が入国した當時、博多の町は戦乱の世も落ち着いて、海外交易で富を得た富裕商人たちが活躍していました。黒田家は鳴井宗室や神屋宗湛といった豪商たちの協力を得ながら、その

如水や長政が礎を築いた福岡藩の治世を、一言で表すとすれば、「町人エネルギーの活用」と「勤儉尚武（業務に勤勉、節約を重んじ、武勇を尊ぶ）」だといえます。

それが黒田流治世術

压制よりも

町人の力を活用、

エネルギーを藩の運営に吸収しています。

過酷な税を取り立てて町人を圧迫するよりも、彼らの才覚を自由に發揮してエネルギーに商いをさせ、その利益に課税するという巧みな治世方針といえます。

財力のある町人たちには、課税と引き換えにかなりの自治権限を

与え、日常的な貧窮者救済や町内の行政活動を任せていたと、「筑紫遺愛集」などに書かれています。

また、当時長く途絶えていた「松囃子」（現在の博多どんたく）の復興を命じたのも、町人活力を盛り立てようとする藩の意向でした。

もう一つの「勤儉尚武」ですが、如水自身は若い頃から非常な儉約家として知られており、たとえば不要になったものを家臣に売却したという逸話や、その生涯を通して「人に媚びず。富貴を望まず」と公言していたことなどから、その精神がうかがえます。黒田家にはこの他にも、「贅沢をするな。見栄を張るな。大きな屋敷を構えるな」などの家訓が遺され、子孫や家臣たちに幕末まで受け継がれました。江戸中・後期に財政困難に陥つた際も、時の藩主や重臣から「藩の原点に立ち返れ」という気運が何度も起こつたといわれています。

築城の名手“といわれた如水が、一説に福岡城に天守閣を建築しなかったといわれ、藩主の庭園として造られた「友泉亭」が他藩に比べると質素であるのも、黒田家の家風によるものでしよう。

藩主の庭園だった友泉亭



池を遊歩道が囲み、緑の木々に覆われた「友泉亭」。池にはコイが優雅に泳ぐ

江戸時代、大名たちは競つて、その権勢と美意識を凝縮した庭園を作りました。岡山藩の「岡山後楽園」、水戸藩の「小石川後楽園」や「偕楽園」、加賀藩の「兼六園」、高松藩の「栗林公園」などです。その多くは今も公園として、人々の憩いの場になっています。

黒田家六代藩主・継高公も、江戸中期に別荘として庭園を造りました。これが今も福岡市城南区に残る「友泉亭」です。黒田家の質素儉約の家風から、他の庭園は明治になると、黒田家の手を離れて、小学校や村役場、駐在所、民間の別荘などにその姿を変えました。昭和53年に福岡市が取得し、56年に友泉亭公園として開園しました。

江戸時代、大名たちは競つて、その権勢と美意識を凝縮した庭園を作りました。岡山藩の「岡山後楽園」、水戸藩の「小石川後楽園」や「偕楽園」、加賀藩の「兼六園」、高松藩の「栗林公園」などです。その多くは今も公園として、人々の憩いの場になっています。

黒田家六代藩主・継高公も、江戸中期に別荘として庭園を造りました。これが今も福岡市城南区に残る「友泉亭」です。黒田家の質素儉約の家風から、他の庭園は明治になると、黒田家の手を離れて、小学校や村役場、駐在所、民間の別荘などにその姿を変えました。昭和53年に福岡市が取得し、56年に友泉亭公園として開園しました。

黒田藩を物語る古文書の数々

江戸時代、大名たちは競つて、その権勢と美意識を凝縮した庭園を作りました。岡山藩の「岡山後楽園」、水戸藩の「小石川後楽園」や「偕楽園」、加賀藩の「兼六園」、高松藩の「栗林公園」などです。その多くは今も公園として、人々の憩いの場になっています。

黒田家六代藩主・継高公も、江戸中期に別荘として庭園を造りました。これが今も福岡市城南区に残る「友泉亭」です。黒田家の質素儉約の家風から、他の庭園は明治になると、黒田家の手を離れて、小学校や村役場、駐在所、民間の別荘などにその姿を変えました。昭和53年に福岡市が取得し、56年に友泉亭公園として開園しました。

江戸時代、大名たちは競つて、その権勢と美意識を凝縮した庭園を作りました。岡山藩の「岡山後楽園」、水戸藩の「小石川後楽園」や「偕楽園」、加賀藩の「兼六園」、高松藩の「栗林公園」などです。その多くは今も公園として、人々の憩いの場になっています。

黒田家六代藩主・継高公も、江戸中期に別荘として庭園を造りました。これが今も福岡市城南区に残る「友泉亭」です。黒田家の質素儉約の家風から、他の庭園は明治になると、黒田家の手を離れて、小学校や村役場、駐在所、民間の別荘などにその姿を変えました。昭和53年に福岡市が取得し、56年に友泉亭公園として開園しました。

おでかけ
情報

かつての城跡は今、市民たちの憩いの場に

春の桜や藤、夏のハスなど四季折々の花の名所としても有名。城内の「福岡城むかし探訪館」では、歴史も楽しく学べる。

福岡城むかし探訪館

■福岡市中央区区内1-4
☎ 092-732-4801
□9:00~17:00
※7~9月は19:00まで
休 12月29日~1月3日



典雅な藩主庭園で池を眺めてお茶を一服



木々に囲まれた静かな友泉亭には、「如水」の名を冠した茶室もあり、お茶会が開かれるほか写真撮影スポットとしても人気。

友泉亭公園

■福岡市城南区友泉亭1-46
☎ 092-711-0415
□9:00~17:00 休月曜
料 大人200円

せいひつ 静謐な空気が漂う

黒田家の菩提寺・崇福寺

臨済宗大徳寺派の禅寺。旧福岡城の表御門を移築した山門は、福岡県指定文化財。黒田家墓所は、普段は非公開だが、今年と来年は一般でも見学が可能。

崇福寺

■福岡市博多区千代
4-7-79
☎ 092-651-0398



取材協力: 藤香会

福岡藩主・黒田家の遺徳をしのび、郷土福岡の歴史文化を検証しようと、昭和22年に結成された団体。明治期に黒田家ゆかりの人々で結成された「報古会」を継いで改称。家臣の子孫や福岡の歴史に興味のある方々で結成され、黒田家墓所の清掃や、ゆかりの史跡探訪、勉強会などを行っている。平成23年に120周年記念の法要を行った。現在会員数約200人。

藤香会事務所
■福岡市中央区警固1-6-26-205
☎ 092-724-0007

出典

「福岡県史」、「黒田家文書・大岡舍人覚書」
「悲劇の豪商・伊藤小佐衛門」(石風社)、「黒田官兵衛の魅力」(姫路文学館)
「ふるさと歴史シリーズ・黒田藩・300年物語」(西日本シティ銀行)

column

官兵衛たちも町人芸能を愛でた 「博多どんたく」が、今年も華やかに

毎

年5月の大型連休中、全国屈指の観光客が訪れる「博多どんたく」。その歴史は古く、室町時代、博多に人工港を築いた平重盛に感謝する行事から始まつたといわれます。

黒田氏の治世期には、毎年正月15日に、普段は入れない福岡城を博多の町人たちが訪れ、藩主を表敬して治安への



今年のどんたくパレードに参加した黒田家当主。馬上の鎧兜姿に歓声が上がった

御札を言上するとともに、趣向を凝らした扮装や芸を披露して藩主から酒肴を振る舞わ

れたとか。その様子が、櫛田神社蔵の「博多津要録」にも記されています。

恒例のパレードが繰り広げられた今年のどんたくでは、大河ドラマを来年に控えて黒田家16代当主・黒田長高氏が馬に乗って登場。鎧兜に身を包んだ黒田精銳の武士たちとともに、沿道の観衆から盛んな喝采を浴びていました。

博多を彩る二大祭りの一つ「博多どんたく」にも

福岡藩と町人たちとの歴史が秘められています。



黒田長政から数えて16代目に当たる、黒田長高氏



黒田家16代当主・黒田長高氏

普段は東京在住の黒田長高氏も、博多どんたくは毎年楽しみにされています。とくに今年は、先祖が大河ドラマの主人公になるため、感慨もひとしおのご様子。「福岡を訪れるたび、かつての家臣の子孫の方々ともお会いします。これからドラマも興味深く拝見したいですし、自然豊かで活気ある福岡が、県民の皆さんとともにますます発展してほしいと願っています」